

『建長二年・建治二年奥書『金葉和歌集』』



建長二年・建治元年奥書本は、数度の改訂（初度本二度本・三奏本）の跡を残す第5勅撰集『金葉和歌集』伝本のうち、最も流布した二度本であり、その中でも精撰本系とされる（平澤五郎『金葉和歌集の研究』。）

兩架番号 I-16。南北朝期の書写か。列帖装。1帖。縦 24.4cm × 横 17.5cm。楮紙。紙表紙で、紺地に金で霞と蔦唐草を描く。見返しには銀箔を散らす。外題ナシ（中央に題籤のみ有り）、内題「金葉和歌集」。104丁（墨付 98丁）。1面 10行。1首 1行書。蔵書印は「正宗敦夫文庫」の方形朱印他、末尾に「如松菴好信蔵」と墨書され、半円を上下に配置した朱印が押されている。本文は、秋部後半と冬部他、全体的に落丁等による脱落が多いことが惜まれる。

松田武夫『金葉集の研究』に詳しいが、当該書は注目すべき二種類の奥書を有している。一つ目は「此集白河院御讓位之末、木工頭源俊頼朝臣、依院宣撰之。天治元年月日奉之、大治二季奏之。奏覽之後、再三改直之間、本々説々多以相違。但如此草子者、和歌六百六十三首、内返哥十五首、連哥廿首也。如朱筆之本[秘本]者、和哥六百四十八首、内返哥十四首、連哥十八首也。如現在和哥日録者、和哥六百五十四首連哥十六首也。以木工頭白筆之本勘合畢。／建長元年十二月十四日、以大宮三位入道知家卿本書写之。

件本以清輔白筆本所書也[云々]。／明教[在判]である（句読点は任意、[]内は割書）。建長元年（1249）12月14日、明教なる人物が藤原知家（1182～1258）の本を書写したという内容だが、この知家本は藤原清輔の白筆本を書写したものだという。さらに、この清輔白筆本は『金葉集』の撰者・源俊頼の白筆本と校勘したものだったらしい。藤原清輔（1104～1177）は、和歌の家である六条藤家の歌人として名高い人物である。その異母弟の孫で、鎌倉中期の六条藤家を代表する歌人が知家だった。俊頼白筆本と校勘した清輔白筆本を書写したものが知家本だと語る当該奥書の信憑性は高いと考えられよう。

二つ目は「先人奥書之本令相伝之處、去文永七年之比、為或好士被借失了。仍借請他人書写之本、為支至要所染筆也。／建治元年二月廿二日 證悟」というもので、「先人奥書」の本を文永7年（1270）に紛失した證悟（未詳）が、別の本（明教奥書の本か）を借り受け、建治元年（1275）2月22日に書写を終えたと伝える。ただし、平澤五郎によると、当該書は建長2年明教奥書・建治2年證悟奥書を持つ伝本に別本歌が混入した後代の書写本の可能性が高いという。書写年代については、これに随っておきたい。

（日本語日本文学科 准教授 木下華子）